

炉 辺 医 話

私 説 : 血 液 浄 化 - 汚 れ た 血 液 -

阿 岸 鉄 三

板 橋 中 央 総 合 病 院 血 液 浄 化 療 法 セ ン タ ー

< 血 液 浄 化 の 呼 称 の 由 来 >

筆 者 は、医 学 部 を 1959 年 に 卒 業 し、翌 年 イ
ン タ ー を 終 え て か ら 40 年 間、現 在 で い う 血 液 浄
化 の 研 究 と 臨 床 に ほ ぼ 専 念 し て き た。と き に は、
自 慢 話 に 聞 こ え る こ と も あ る か も 知 れ ない が、自 分
の し た 仕 事 も、当 然、そ の 当 時 の 世 界 的 な 流 れ
に し た が っ て い た の で、現 時 代 の 観 点 か ら み た 血
液 浄 化 の 歴 史 的 変 遷 に 時 折 触 れ て み た い。

1960 年 代 初 め に は、ま だ 血 液 浄 化 と い う 明
確 な 概 念 は 一 般 的 で は な か っ た し、用 語 も な か っ
た。こ の 頃 に は、血 液 透 析、あ る い は 人 工 腎 臓 の
呼 び 名 が 一 般 的 で あ っ た。技 術 と し て は 血 液 透
析 が、臨 床 応 用 は 腎 不 全 患 者 に ほ ぼ 限 ら れ て
い た の で、そ れ で よ か っ た の で あ る。血 液 浄 化 の 用

語が明らかに論文にでてきたのは、一般には、1967年のHendersonらのhemodiafiltration（血液透析濾過）についての論文におけるblood purificationが最初とされている。つまり血液透析以外の技術も開発されて全体を総合する名称が意味をもってきたのである。しかし、概念的には、1913年にAbelらがイヌの実験で、"vividiffusion（後の血液透析）が毒血症（血液中に病気の原因になるものがあるという考え）の治療になるであろう"と予見したことに、すでに示唆されていたと考えられ、現代的血液浄化に基本的理念をあたえたものと評価される。

さらに古く、文献的に直接探ることはできないが、中世には、治療としての瀉血（血を抜いて捨てること）があったされる。米国の初代大統領ワシントンは、霽の降る季節に戦場で咳と熱に悩まされていた（肺炎に罹っていたのか）。軍医が、瀉血をし、あまり効果がなかったので翌日再び瀉血をしたところ、死んでしまったと書いてあるのを読んだ

記憶がある。総瀉血量は、4リッターに及んだという。200年前の話である。

< 血液浄化の意味 >

血液浄化の用語・概念が医学界で一般的になったのは、この領域の技術先進国であるわが国でも、1980年代になってからと考えられる。例えば、同じ技術の血液濾過がある場合には腎不全の患者に適應されて人工腎臓と呼ばれ、別の場合には人工肝臓補助と呼ばれる不合理さが認識されるようになったためと考えられる。

血液を浄化する考えには、逆説的に、血液が何らかの意味で汚れている考えが裏にある。わが国には、古くから“汚れ”、“穢れ”の考えがある。多くは、死者・死体について考えられいたようで、感染性疾患が原因で死亡したことに由来することが伺われる。それで、“清浄”、“潔斎”が必要と考えられたのであろう。

また、数十年前まで、“あそこの家系は、血が汚れている”というような表現をすることがあったことを覚えている。現代では、差別的表現と非難されるかも知れないが、過去にそういうことがあったといっている。意味するのは、精神的異常であることが多かったと記憶している。このこととは直接関係はないが、1970年代に精神分裂病が、その頃一般的医療となりつつあった血液透析によって治療できるとされて、世界的に話題になり、わが国でも治験がおこわれたことがある。また脇道の話であるが、筆者は、透析導入前の尿毒症の精神症状として精神分裂病様となり、精神科専門の医師にも、そう診断されながら、血液透析を繰り返すうちに精神症状も消えてしまった2例の患者を経験している。

瀉血量が多いほど、瀉血は臨床的に効果的である。しかし、ワシントンの例もあるように、多すぎると循環血漿量が少なくなり、死にまで至る。そこで、血液を補うものとして輸血が考えられた。とき

には、異種動物血の輸血も行われたこともあったようであるが、人間同士の血液の輸血でも、うまくいって助かる場合もあるが、逆に、病状は悪化し死に至ることもあり、血液型の発見につながったといわれる。1900年のことである。ついでながら、輸血は英語で transfusion(trans=向こうへ、個体を越えて、fusion=注入する)である。自己血輸血は、個体を越えていないのに autologous blood transfusion である。ある国際学会で、native American の輸血学者に用語としておかしいのではないかと質したことがあるが、納得のいく返答が得られなかった。言葉は、しばしば本来の意味から逸脱して使われることがある。

話をもとにもどすと、筆者の子供のころ、毒を抜くという民間療法があったのを覚えている。100ml程度のガラス製容器にアルコールをしみこませた綿花を入れ、火を付けて肩などの皮膚に密着させる。内部は陰圧になり、局所的な皮下出血がおき、あるいは小切開、または穿刺創から数十

m l の血液がでてくる。現代医学的にみて、これにはどんな効用があったのであろうか。瀉血とするには、量が少なすぎる。せいぜい考えられるのは、皮下出血の血液が変性し何か免疫学的刺激を及ぼしたのであろうか。